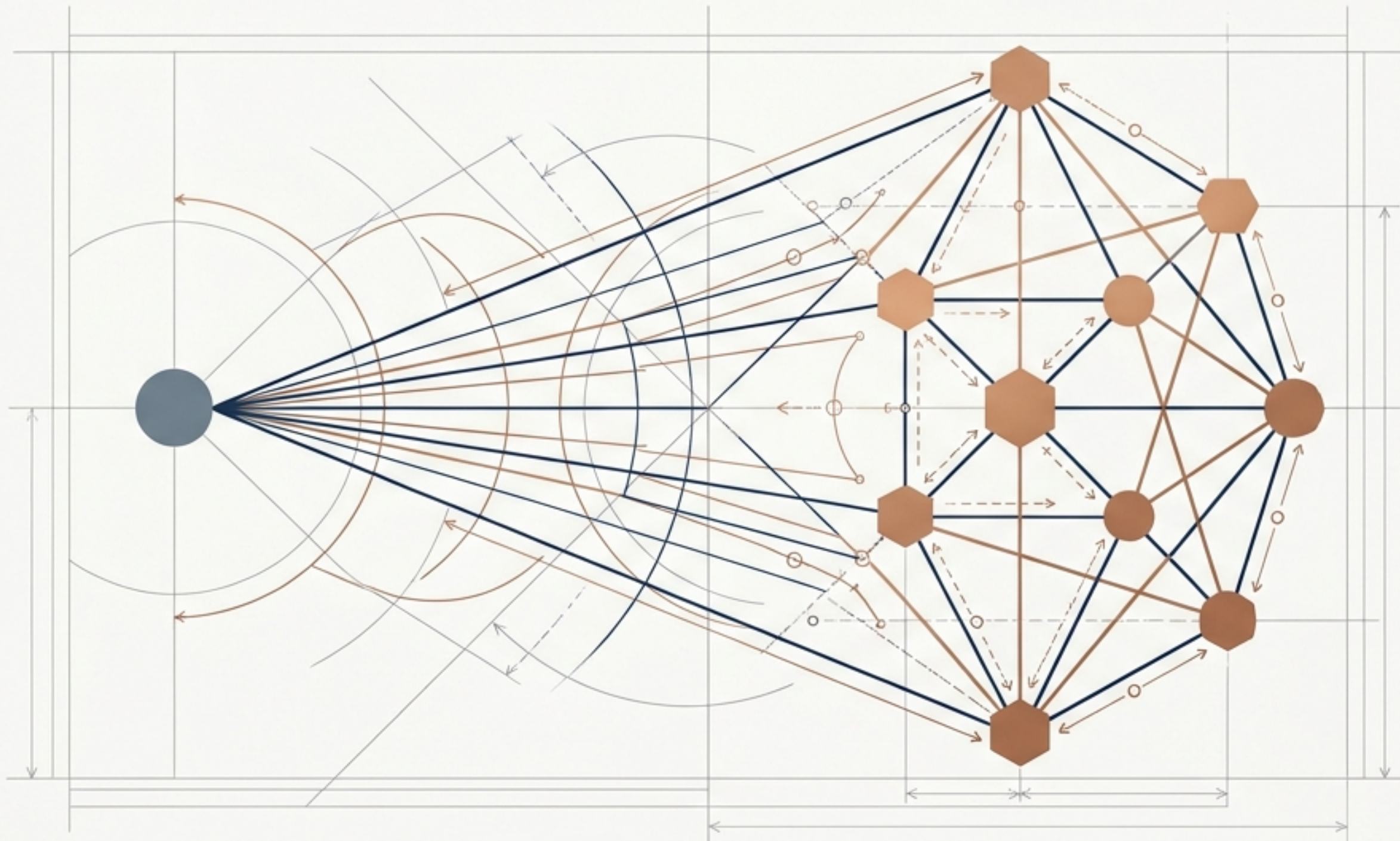


知財AIにおける「点」から「面」への地殻変動

2026年知財・情報フェアに見る、特許網構築AIの世代交代と無形資産ガバナンスの再定義



単一タスクの効率化は終わった。新機軸は「特許網の自律設計」

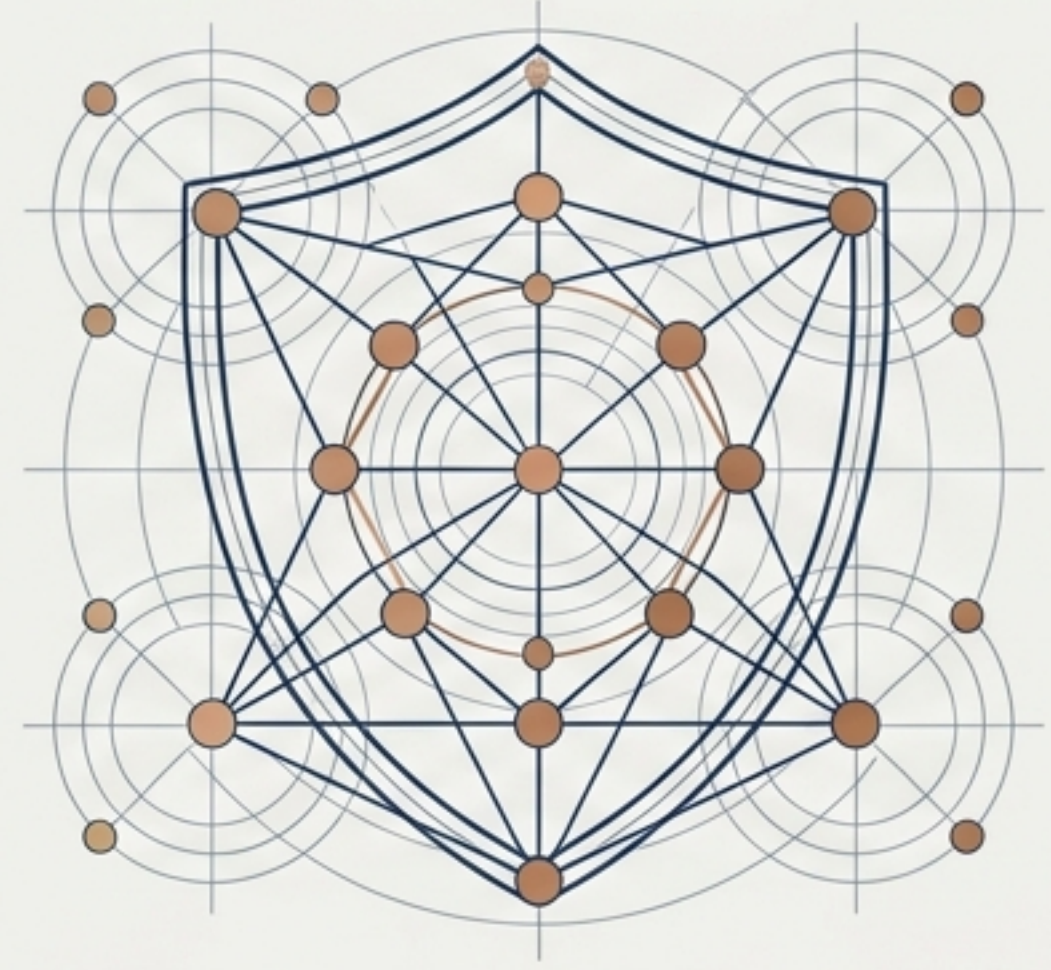
2025: 点の効率化



- 検索拡張生成（RAG）による公報要約
- 明細書ドラフトの単一作成
- 拒絶理由通知へのクレームチャート作成

結論：既存プロセスの「下請け的自動化」

2026: 面の自律設計

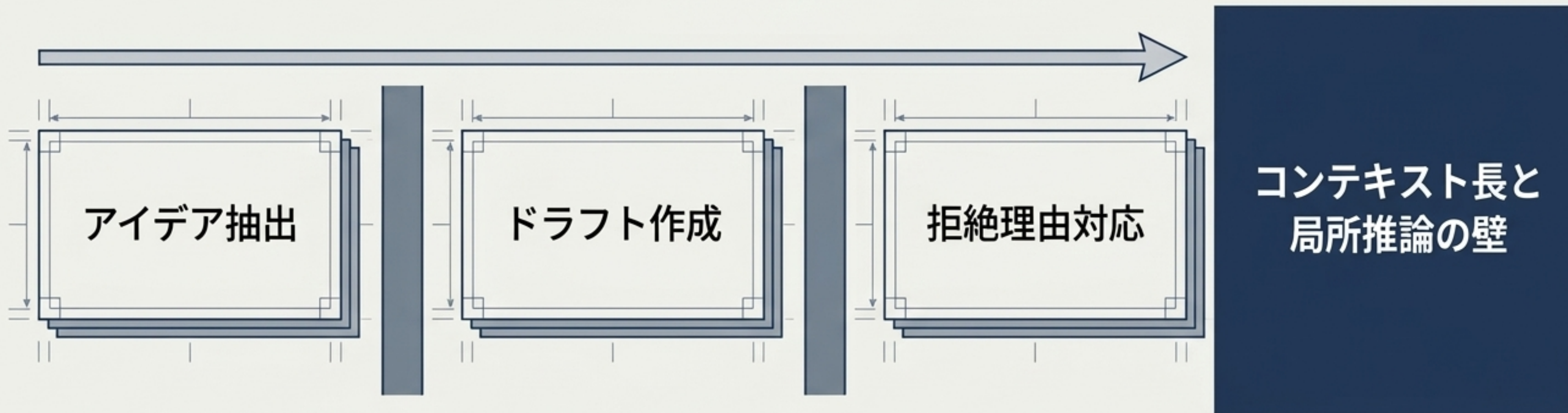


- 基本特許を起点とした周辺特許群の自動導出
- 複数AIモデルの合議による死角排除
- 社内データとグローバル特許DBの直接統合

結論：参入障壁を構築する「戦略的アーキテクト」

汎用RAGによる「点」の自動化が直面した壁

2025年の限界



局所的タスクへの限定

2025年の主戦場は、1件の発明をいかに早く文書化するかに終始。

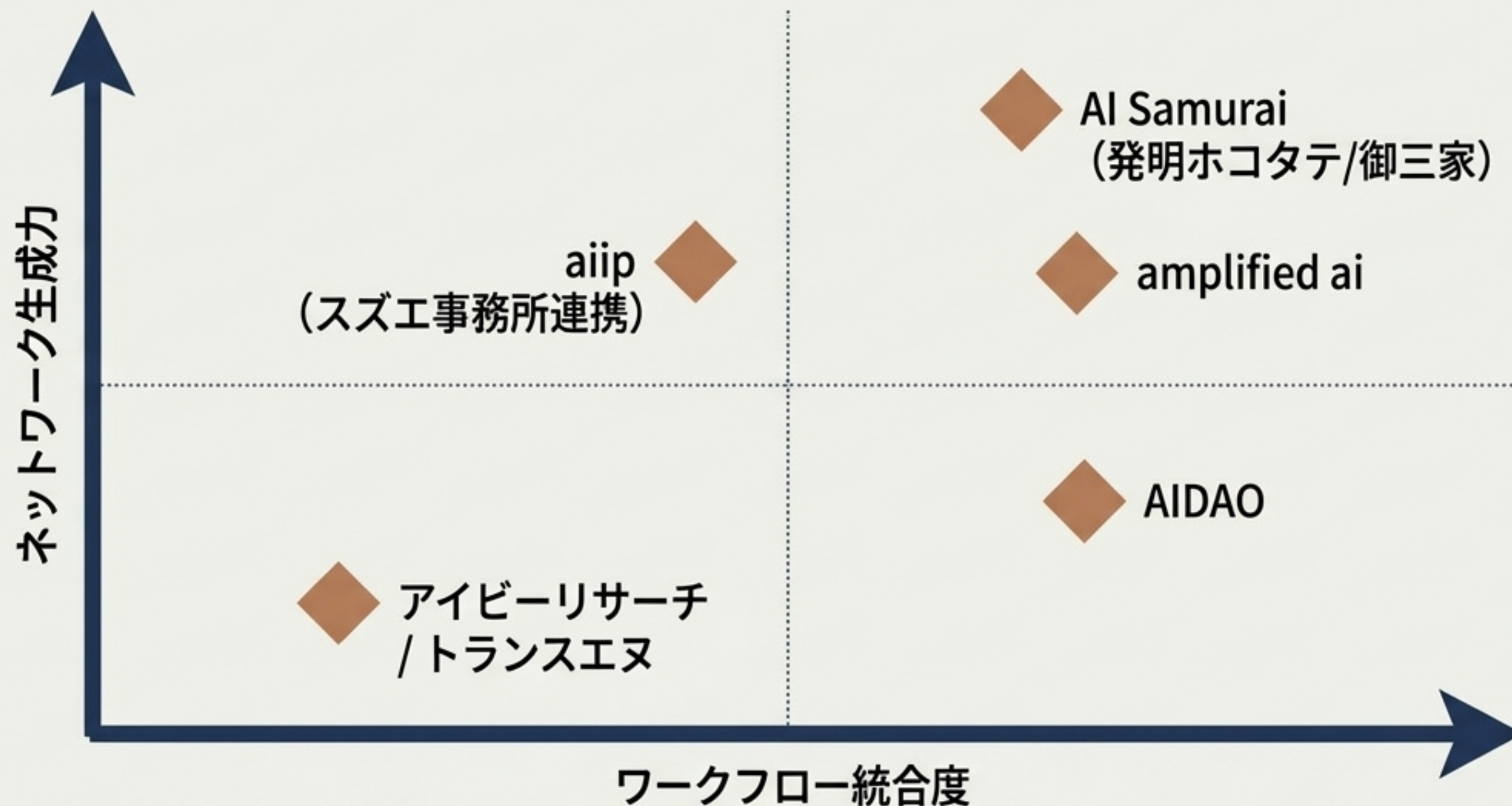
差別化の喪失

共通財である公開特許公報をLLMに読ませるだけでは、競合との優位性が構築できない。

技術的限界

1件の特許公報全文を入力して構成要件を対比させるだけでも、当時のコンテキスト長の限界と事実誤認が懸念されていた。

2026年先端ソリューション群：インフラ化するAI



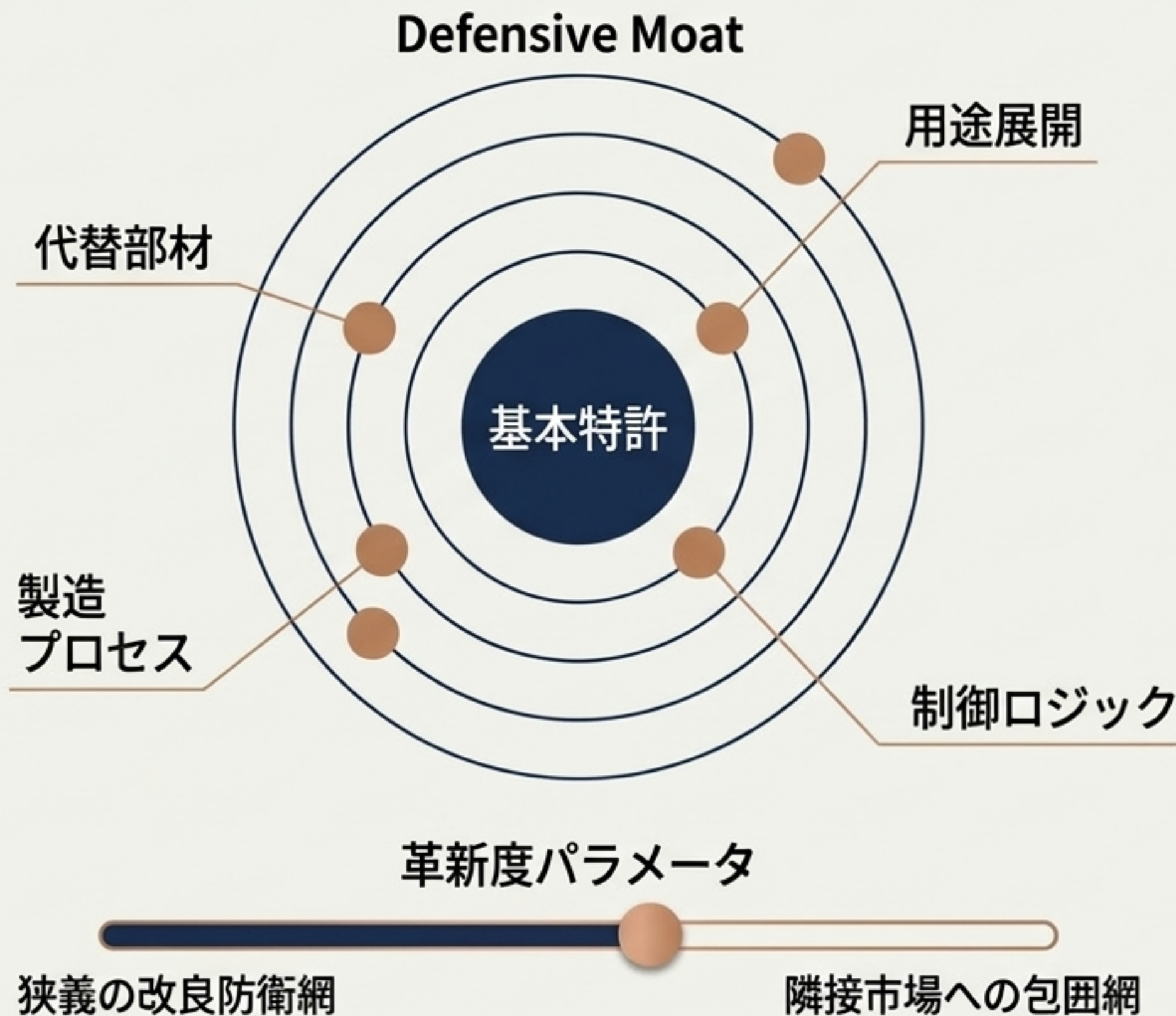
2026年知財フェアでは、講演114枠中76枠（約67%）が生成AI/LLMをテーマに。
AIは差別化ツールから「実務の前提」へと定着。

実務スコープと技術構造の全面的な変革

パラダイムシフト・マトリクス (2025 vs 2026)

次元 (Dimension)	2025 (過去)	2026 (現在)
対象スコープ	単一明細書の作成・個別FTO	基本特許から周辺特許群を自動生成成。参入障壁デザイン。
アーキテクチャ	スタンドアローン型RAG / 単一モデル	マルチLLM合議 × 自律型エージェント。多段論理処理。
データ連携	ツールごとのデータサイロ・手動インポート	MCPによる特許DB直結。
人とAIの協調	作業代行型 (担当者が全責任を負う初稿作成)	役割分業型ハイブリッド (AIが網羅的生成、人は法的リスク監査)。

イネーブラー1：包囲アルゴリズム（発明ホコタテ）



5分の自律設計

1件の基本特許を入力するだけで、競合の迂回ルート在先回り予測。約5分で5～6件の周辺特許群案を一括生成。

戦略的制御

単なる言い換えではなく、「革新度」パラメータの調整により、防衛レイヤーを動的に割り振る。

パラダイムへの影響

網羅的パテントポートフォリオの構想プロセスが、アルゴリズムにより半自動化。

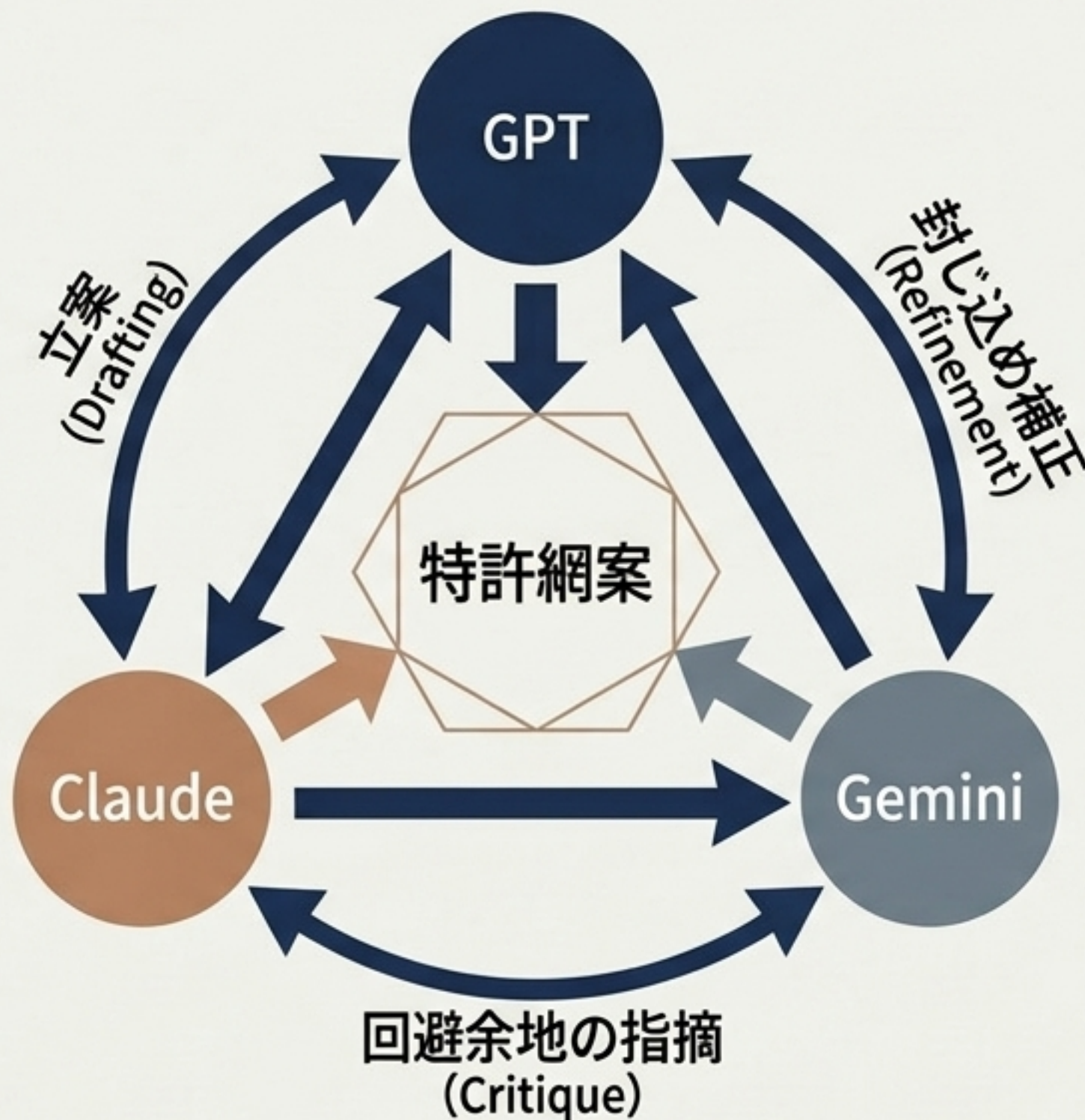
イネーブラー2：異種基盤モデルの合議 (発明御三家)

単一モデルの限界

単一AIによる思考パターンへの依存は、特許網構築において致命的な「論理の抜け漏れ」を生む。

相互批判サイクル

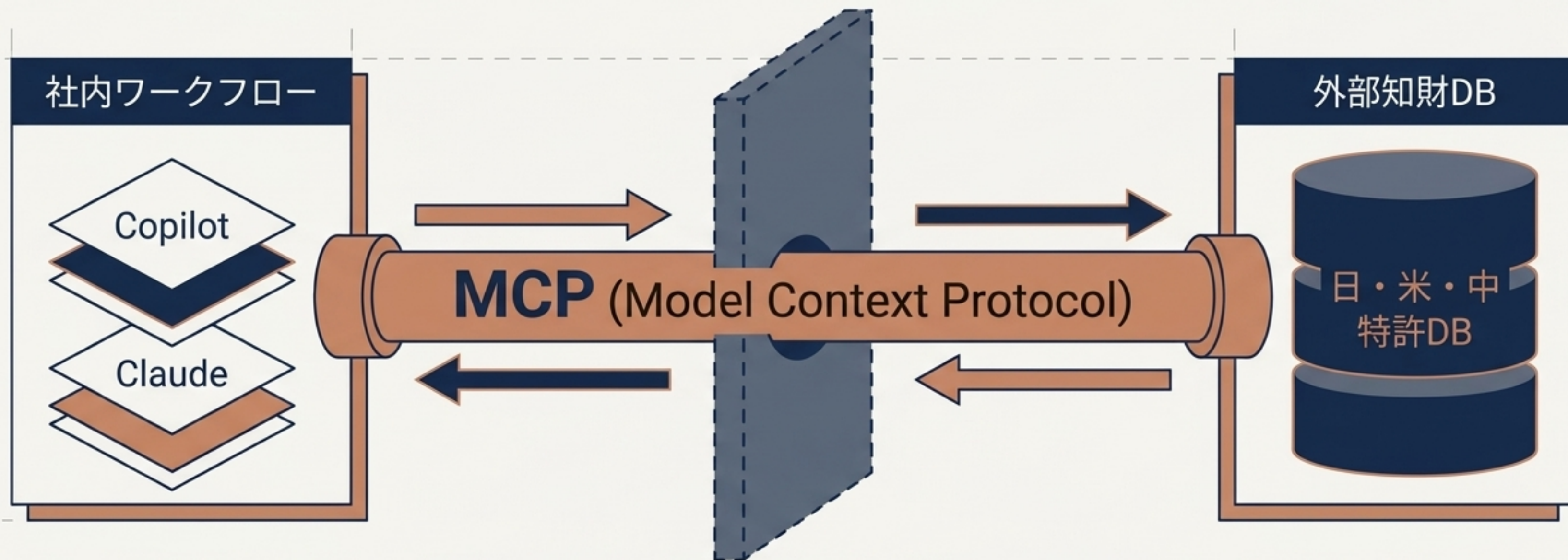
設計思想の異なる主要3モデルを同一プラットフォーム上で対話させる。



死角の排除

提案、競合視点からの批判、代替案による補正というプロセスを通じ、論理的死角のない強固な特許網を設計。

イネーブラー3：データサイロを破壊するMCP



直結されるインフラ

Anthropicが提唱したMCP規格の知財DBへの適用。AIインフラと特許データが直接繋がる。

シームレスな分析

独立した検索SaaSと作業ドキュメントの往復（手作業）が完全に撤廃される。

リアルタイム探索

普段の社内LLM環境からグローバル特許データベースを直接呼び出し、未権利化領域を埋める特許網を設計。

イネーブラー4：機密保持と組織知の内製化

クラウド利用規約の先へ：最も機密性の高い出願前アイデアを守るため、汎用クラウド依存からの脱却が進行。アプローチは二極化している。

完全オンプレミス遮蔽型

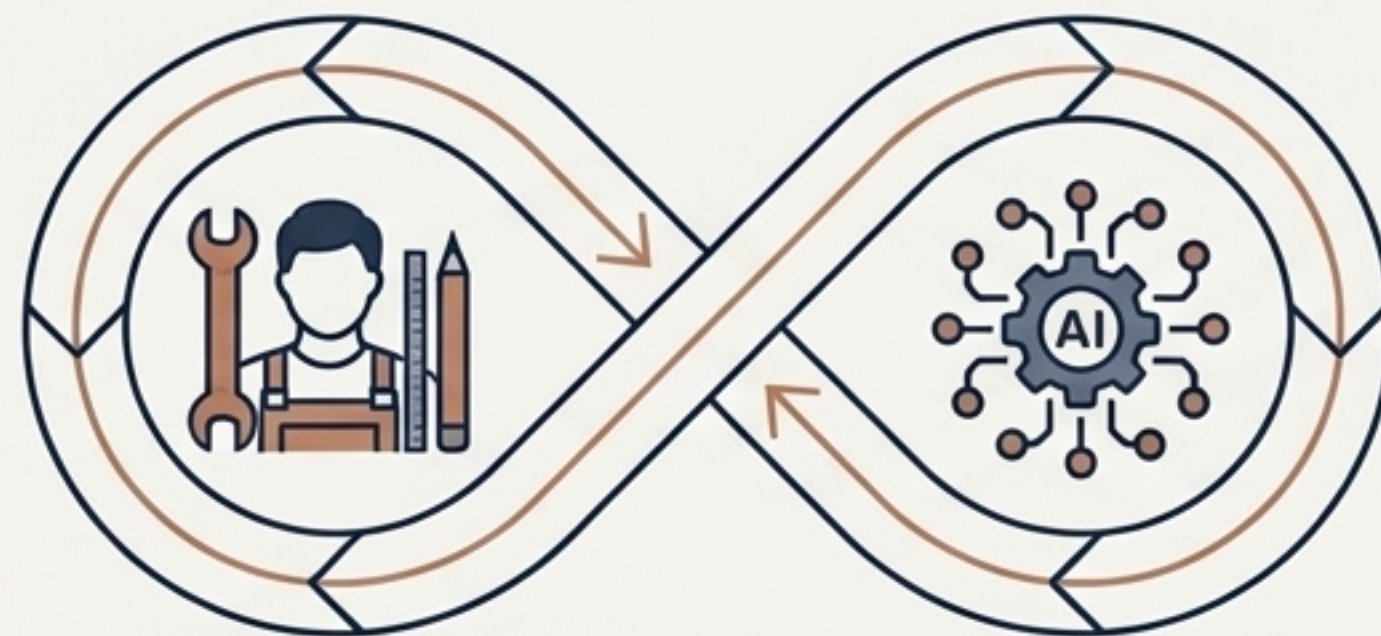
(アイビーリサーチ / トランスエヌ)



物理的遮断により、完全オフライン特許専用LLMで情報漏洩リスクを排除。

FDEによる内製化

(AIDAO)

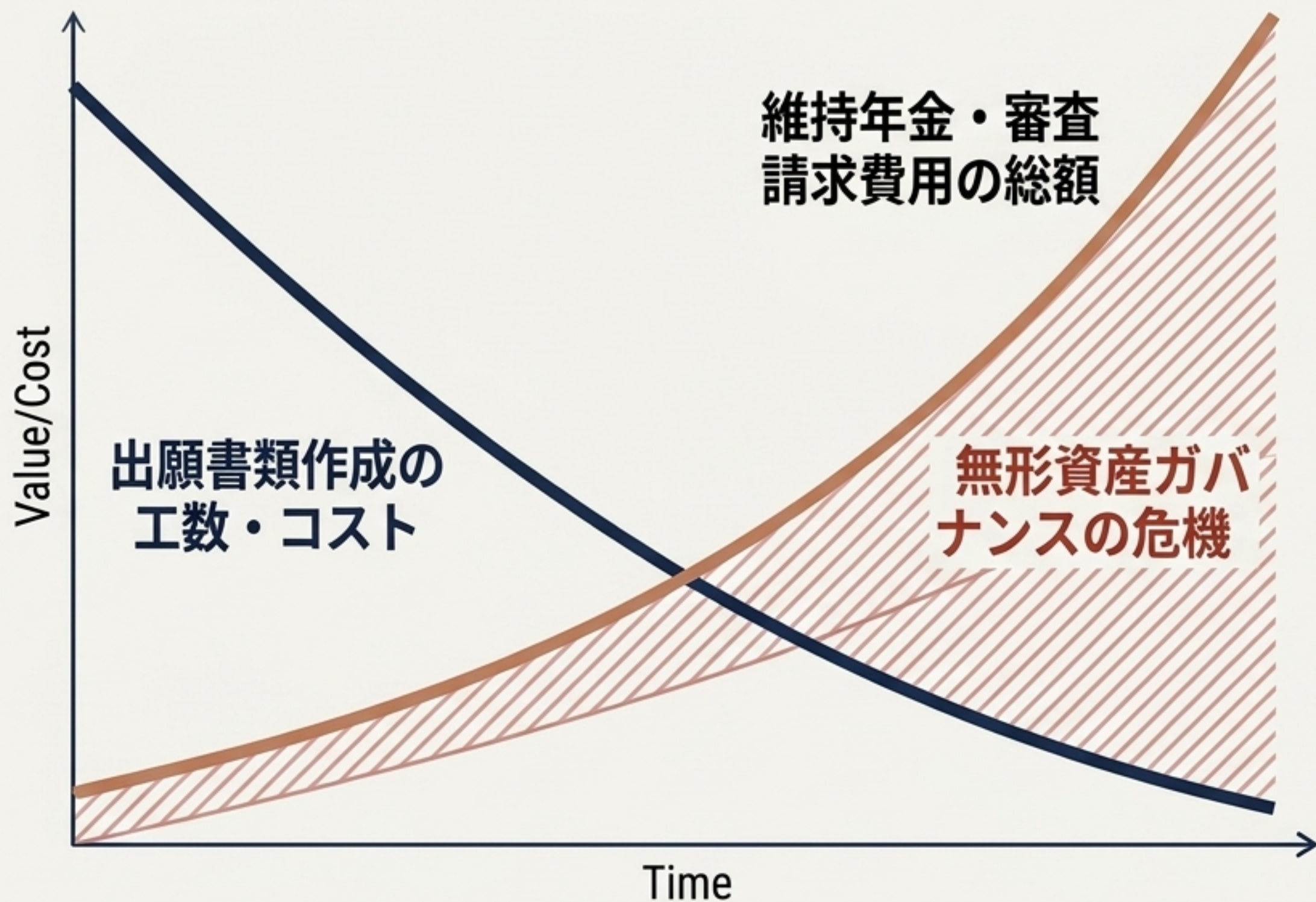


Internal Human Engineer

Continuous Integration AI Hub

自社固有の出願履歴や技術ノウハウをAIに組み込み、知財部門が直接統制・改善するケイパビリティ構築。

新たなボトルネック：生成の無限と予算の有限



• 生産性のジレンマ

AIが周辺特許網を短時間で量産できる結果、実効性の低い特許まで無制限に出願すれば、数年後の維持年金が指数関数的に膨張する。

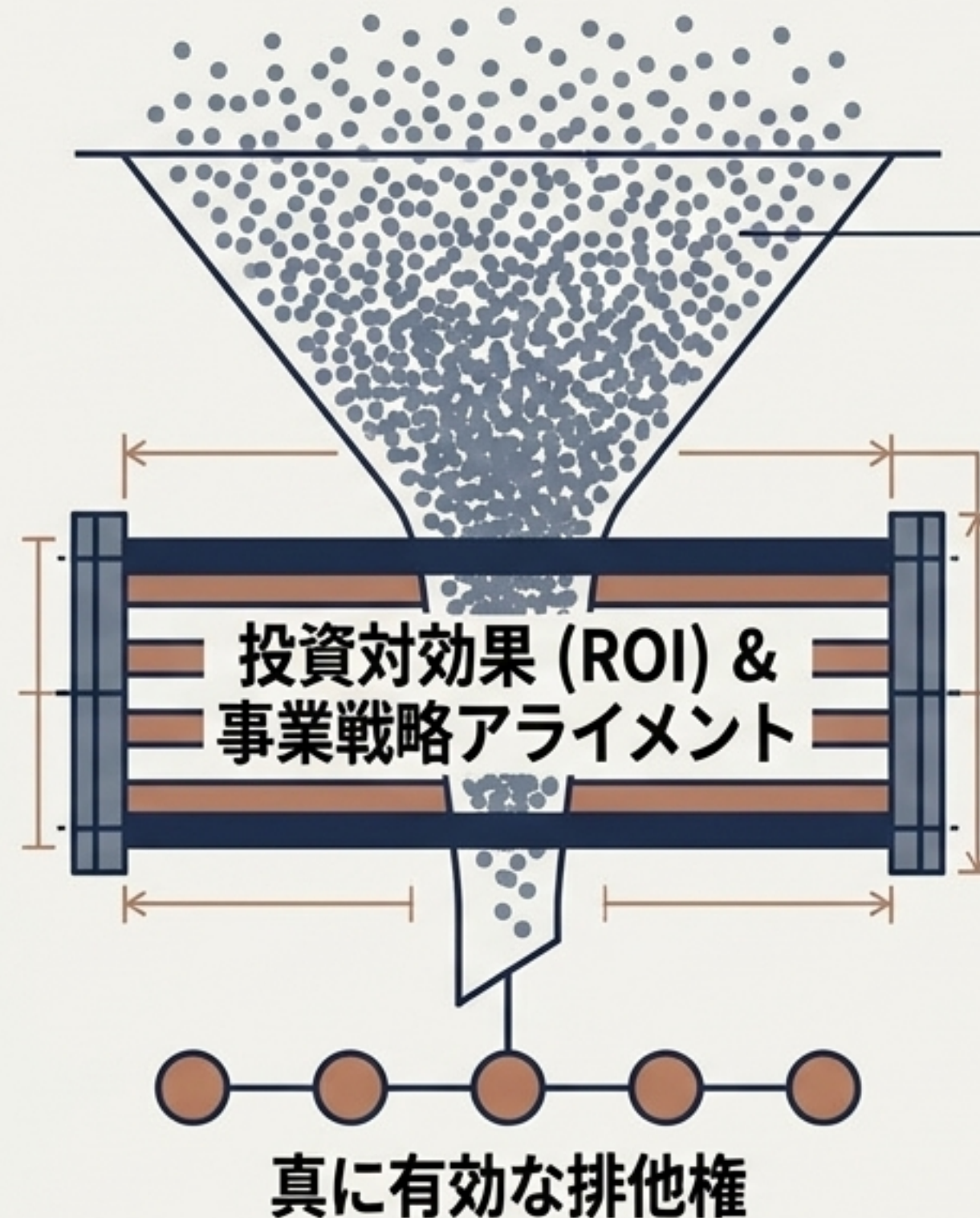
• 経営課題のシフト

知財ROICや企業価値担保権への関心が高まる中、AIによる「権利量産時代」のコスト膨張リスクへの強い危機感が生まれている。

知財リーダーの新ミッション：「選別のガバナンス」

「作る」から「選ぶ」へ

課題は「出願書類の作成能力」から「出願・維持費用の配分判断」へと完全に移行。

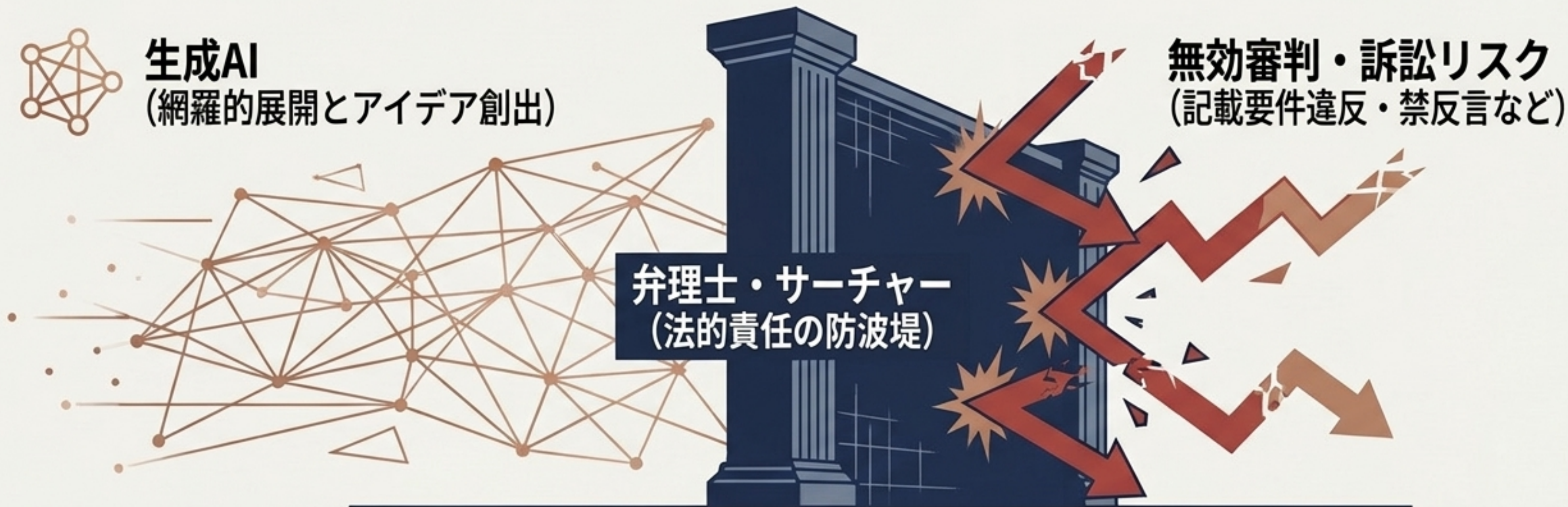


特許網候補
(AIによる無限の生成)

高度な選別

AIが提示した膨大な選択肢から、自社製品の御や競合牽制に真に寄与する権利を、事業計画と照らし合わせて峻別する能力が不可欠。

人間の再定義：法的責任の防波堤（Legal Firewall）



新たな協業モデル

AIが構造化した出力を起案し、
専門家が精査・補正して特許庁へ提出する
ハイブリッドモデルへの移行。

人間の専権事項

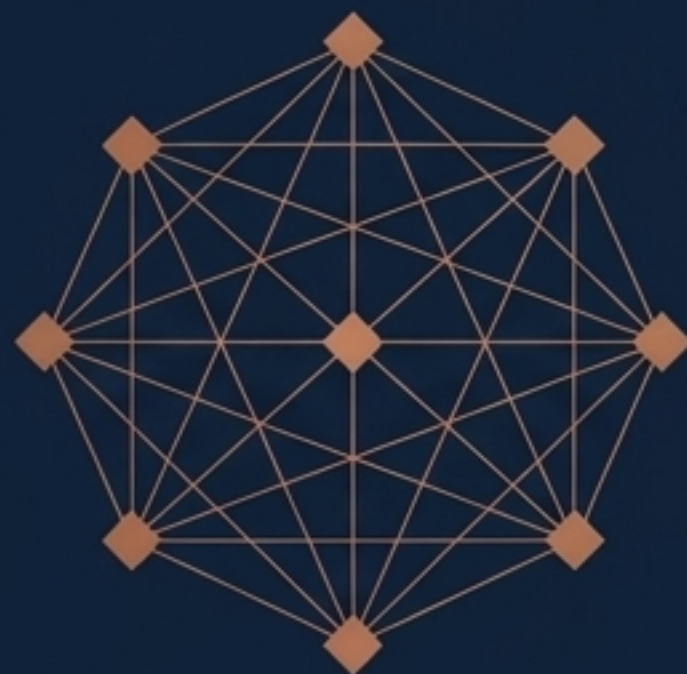
初期の網羅的展開はAIに委ねる。専門家は将来の法的リスクを排除する「品質と責任の担保」に特化する。

結論：下請けツールから「参入障壁の共同設計者」へ



- AIは知財業務の「効率化下請けツール」から次元を超え、事業参入障壁を設計する「共創パートナー」となった。
- 単一の出願書類を早く安く書くための効率化競争は、完全に終焉を迎えた。

勝負を決するのは「知財経営アーキテクチャの優劣」



基本特許を核とした多層的防衛網をアルゴリズムでいかに美しくデザインし、それを自社の事業計画および知財予算ガバナンスとどう整合させるか。無数の選択肢の前に立ち、事業の本質的価値を見極める戦略的判断こそが、これからの競争優位となる。